

# 謝るつ誤ったのなら

週のはじめに考える

謝りかけに誤り裁

## 時代を

## 読む



専修大学教授 山田 健太

安倍政権時代の公文書の改竄・隠蔽・廃棄の歴史を振り返ることはしないが、その後の菅・岸田政権も、その方針を受け継いでいるように見受けられる。直近の事例でも、統一教会の名称変更を巡る文部科学省決定に係る公文書はのり弁といわれる状態で真っ黒に塗りつぶされていた。ただ、こうした公文書の非開示は日常茶飯事で、ニュースでもそれぞれを問題視することがなくなってきた。まさにオープンにされな

いことが一般化してしまい、社会全体が慣れてしまっている証拠だ。

隠す文化は政府関連機関にも及び、東京五輪・パラリンピック組織委員会の決算書類は、行政機関でないことを理由にほとんど非公開のまま。長野五輪同様に、このそとで廃棄され、検証の道は閉ざされることになるだろう。さらに同委員会については「発信者の申出により公開を停止しています」との表記の下、国立国会図書館のウェブアーカイブの公開対象からも外れてしまい、過去の公式な大会発信情報すらアクセスできなくなってしまった。どこまでも「見せない化」を進めるのがこの国のしきたりといえることになる。

さらに隠す文化は、それを暴く側であるはずのメディア一般にも広がっている。最たるものがテレビのワザイクであり、新聞でもよく出てくる関係筋表記だ。いまや画面にはテロップとワザイクが氾濫する状況で、一番大切な事実が奥に押し込められているありさまだ。このワザイク多用のきっかけは、一説にはオウム真理教事件からとされているが、プライバシー保護を名目に覆い隠す作用は、政府が行う公文書の黒塗りとかかわらないのではなかろうか。

メディア自体の一見工夫に見える所作が、必要以上に隠す文化を許容し、むしろ積極的に後押しをしているという自覚が必要だ。隠すことで得をしているのかをきちんと問い、社会全体が「事実」を共有し「歴史」を検証できこそ、はじめて進歩がある。もちろん知りえた過去の経験に目をむくことは意味がないのであって、先例で手続き上の問題が指摘されていた方法で国葬を強行するの、法の支配に反する。

今日、民主主義国家においては、政府とりわけ政権が勝手に物事を決める、不透明な政策決定を排除する目的で、公文書の管理や情報公開の仕組みが整備されてきた。市民からみれば、主権者として国が保有する情報を共有するための知る権利だ。日本においては今世紀に入って形は整えられたものの、この二十年間骨抜きが急速に進んでいる。

首相は七月十四日の記者会見で、死去した元首相の国葬実施を表明した。その後、同二十二日の定例閣議で「故安倍晋三の葬儀の執行について」が議題になり承認された。議事録と称される文書が後日、官邸ウェブサイトで公開される習わしが、報告内容が記されるだけで議論の中身が示されることは一般に一切ない。閣議決定したと手続き的な正当性が主張されるものの、どんな意思決定の経緯があったのかは、このままでは未来永劫わからないままだ。

日本社会の美德として隠す文化が存在する。しかしそれは決して、為政者や強者が自らの都合の悪いことを覆い隠すことであってはならない。そんな身内の論理で市民から事実をみえなくすることを防ぐための社会制度の一つが法の支配だ。

# 隠すことは法の支配にもとる

先月行われた都知事杯学童軟式野球大会で優勝した板橋区の高島工イト。全日本大会にも東京代表として出場する＝東京都八王子市



小学生球児の甲子園。高田富陽杯第四十二回、式野球大会マクドナルドがまず開幕します。社会面の熱中症予報赤で塗りつぶされる日。コロナ対策とともに、暑な課題です。

今大会は、試合時間がまだ「一時間半」か、グはまだ「一時間半」に同時に、午前二試合、合として、最も暑い時を行わないことになり

「今日の発言欄のミラーに感動した。日本中の人に読んでほしいと思った」(横浜70代女性)、「ミラーは良かった。結びの幸福で解決するものは何一つないのだ」の言葉に心を打たれた(都内60代女性)。

これは7月18日の発言欄に掲載した都内在